

重症心身障害児の授業形成過程についての研究

—授業及び授業反省会の発展的経過—

A study of the process of making classes for children with severe motor and Intellectual disabilities.
A developmental progress of classes and meetings to review classes

山西 智美*、三木 裕和**、谷中久和***

(*鳥取県米子児童相談所、鳥取大学地域学部 2015 年 3 月卒業 **鳥取大学地域学部

***鳥取大学地域学部 附属子どもの発達・学習研究センター)

キーワード：重症心身障害 Severe Motor and Intellectual Disabilities, 授業形成過程 the process of making classes, 反省会 meetings for reviewing

はじめに

渡部 (1996) は「重症心身障害児は、永らく福祉・教育の公的サービスの対象から除外されてきた。しかし、日本においては、1960 年代によく福祉対象として認知された後、1979 年度の養護学校教育の義務化によって、学校教育の対象に基本的に組み入れられた。これは当該児を福祉ないし医療の対象に限定して教育対象に認めない国が少なくない中で、世界的にみても注目すべき到達である」としている。

重症心身障害児 (以下、重症児と略する。) に対する授業を行うためには、医療や教育の専門性も大切であるが、それと同時に子どもの発達の理解と授業を構成する力量が必要である。最重度とされる重症心身障害の教育は、障害対応領域である「自立活動」が重視され、文化的な取り組みや内面理解を前提とした授業が軽視されやすい。本研究では、その問題意識に立って、重症児を対象とした「おはなし活動」の授業づくりに着目した。本研究の目的は以下の通りである。

①運動障害と知的障害の重い重症児の授業は、どのような形で構想され、修正されるのか、その授業づくりのプロセスを明らかにする。

②教師たちは、授業中のどのような様子から児童生徒を理解していくのかを明らかにする。

上記の 2 点を明らかにするため、鳥取県立白兔養護学校訪問学級 (国立病院機構鳥取医療センター重症児病棟) にて、授業観察及び授業反省会に参加し、授業形成過程の研究を行った。本研究は、山西の卒業研究 (2015 年 1 月、鳥取大学地域学部) をもとに、三木、谷中が共同で検討を加えたものである。以下、文中、「筆者」は山西を指す。

1. 重症心身障害と授業

(1) 重症心身障害とは

重症心身障害児とは、児童福祉法 (1967 年改正) によると「重度の知的障害及び重度の肢体不自由が重複してい

る児童」(第 7 条第 2 項) と規定されている。

しかしながら、実際の臨床像はさまざまである。その中でも事例報告などで一般的に使用されているのが「大島の分類」である。

「重症心身障害」という概念は行政上の措置を行うために生まれた定義であり、医学的診断名や教育的用語ではないが、この定義は広く浸透しており、医療、教育、福祉などにおいてほぼ共通の概念となっている。

教育現場では「重複障害児」と呼ばれるが、2 つ以上の複数の障害を併せ有する場合との規定となっており、これは範囲が広い概念となっている。本研究では訪問学級の児童生徒の実態が「重症心身障害児」の定義に該当すると考えたため、重症心身障害児と表記することとした。

<図 1 大島分類>

21	22	23	24	25	(10)
20	13	14	15	16	75
19	12	7	8	9	50
18	11	6	3	4	35
17	10	5	2	1	20
走る	歩く	歩行障害	座れる	ねたきり	

<肢体不自由>

(2) 授業と教育課程

渡部は、「授業」の成立について「①教師—教材—子ども②教育的人間関係③教育技術④教育内容・教材・教具」の 4 つが授業の成立要件であると述べており、重症児に対する「授業」についてもこの 4 点を満たしているため、成立すると述べている。

重症児の教育課程は発達段階や障害の程度に応じて、比較

的弾力的に編成することが可能となっている。また、特別支援学校の学習指導要領には授業時間についても、重複障害者等に関する教育課程の取り扱いにおいて、「5 重複障害者、療養中の児童若しくは生徒又は障害のため通学して教育を受けることが困難な児童若しくは生徒に対して教員を派遣して教育を行う場合について、特に必要があるときは、実情に応じた時間数を適切に定めるものとする。」との規定がされている。このように、障害の重い児童生徒の実情に即した教育が行われるよう、教育課程、時間共に配慮がされている。

2. 「おはなし活動」の授業観察と授業反省会

(1) 授業および反省会の概要

訪問学級において、「おはなし活動」の授業観察及び、授業反省会に参加し、授業反省会の記録から、重症児に対する授業形成のプロセスや教員の児童生徒理解の視点を明らかにした。授業観察の詳細は以下の通りである。

研究対象の教科・領域

おはなし活動（各教科等を合わせた指導）

毎週木曜（13:30~14:15）、訪問学級教室にて

題材名

「はっきよい畑場所」（原作、講談社創作絵本『はっきよい畑場所』、かがくいひろし、講談社、2008）

内容

相撲をモチーフとした人形劇。たまね錦、にんじん若、だいの嵐など野菜の力士たちのおおずもう畑場所の千秋楽を描いた作品。個性的なキャラクターの登場、結びの一番の盛り上がり、呼び出しや行司など相撲独特の語り口調、象徴的な擬音などを楽しむ。

観察期間

2014年4月～9月（全12回）

※筆者は1, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 11回目の授業（計8回）を観察し、授業反省会（計8回）に参加した。この論文では、第1回、第3回、第5回、第6回、第7回の変遷を追う。

対象

訪問学級児童生徒、全9名

（小学部 3人 中学部2人 高等部4人）

※知的障害、運動障害ともに重度で、乳児期前半の発達段階の者を中心に、乳児期後半にさしかかる者も一部含んでいる。聴覚優位の児童生徒が多く、視覚的に対象を捉えることは難しい。いわゆる「反応性が乏しい」とされることの多い児童生徒である。食事は経口摂食（全介助）2名。その他は胃ろうや経鼻経管栄養など。気管切開をしている子や痰の吸引が必要である子などが在籍する。その日の児童・生徒の体調によって参加者が異なる。

職員の数：教師6名、学校看護師1名

（看護師は2人いるが、一人ずつ交互に出勤）

授業反省会：毎授業後、全教職員で行う。授業風景と児童生徒の様子を同時に撮影した2本のビデオ映像を見返しながら反省点を話し合う。

(2) 「おはなし活動」と人形劇「はっきよい畑場所」

「おはなし活動」は、各教科等を合わせた指導となっており、「生活」「国語」「道徳」「自立活動」を取り入れた活動を行っている。主な目的としては、お話しを取り入れた活動を通して、題材の雰囲気を受け入れて自分らしく感情表出する力を育てることである。

劇を教師が一生懸命演じ、子どもがそれを見るという方法をとることで、子どもたちが純粋におはなしの内容を楽しめるように工夫を行っている。題材ごとに、演出方法・効果を変化させることでその題材に合った見せ方ができるように工夫がされている。また、障害の重い子どもたちが劇の内容を理解するためには一定の繰り返しが必要であるため、1つの題材を3~4ヶ月の長期間行うこととしている。

2014年度の年間計画によると、該当年度の学部別目標は以下の通りである。

【小学部】お話しを取り入れた活動を通して、お話しの雰囲気を受け止めたり受け入れたりする力を育てる。

【中学部】お話しを取り入れた活動を通して、お話しの雰囲気を受け入れて自分らしく表出する力を育てる。

【高等部】お話しを取り入れた活動を通して、場面に応じて自分らしく表出する力を育てる。

<図2 授業で使用される、教員の自作人形>

 <p>なすび里 たまね錦と対戦する。 たまね錦の皮に滑って転び、負ける。</p>	 <p>たまね錦 なすび里と対戦する。 皮がむけ、たまたま勝利する。</p>
 <p>にんじん若 きゅう竜と対戦する。 きゅう竜のイボが身体にあたり、耐え切れず負ける。</p>	 <p>きゅう竜 にんじん若と対戦する。身体のイボのおかげで勝利をつかむ。</p>
 <p>だいの嵐 横綱。 すい海と対戦し、勝利する。 病弱ですっと咳込んでいる。 対戦中のクシャミですい海を飛ばし、勝利する。</p>	 <p>すい海 横綱。だいの嵐と対戦し、負ける。 飛ばされ、割れてしまう危機に直面するが、だいの嵐に受け止めてもらい、助かる。</p>

「おはなし活動」の学習活動にはB訪問学級の教員全員が関わり、それぞれの役割をもっているため、子どもの様子を観察して記録を取ることが難しい。そのため、教師の動き（舞

台側)と児童生徒向けの2台のビデオで授業風景を記録し、反省会で見返している。反省会は毎回の授業後に必ず行われる。全員でビデオを見ることによって、児童生徒の表出について様々な意見交換をすることができ、また、児童生徒の表出について共通理解を図る機会となっている。

人形劇「はっきよい畑場所」は、野菜の力士たちの相撲大会を描いた作品となっていて、野菜の特徴を活かして勝ち進む力士の戦いが面白い作品である。

この作品を題材にするにあたって教師たちは、「食べ物を食べる経験の少ない子どもたちに野菜を題材としたお話しをすることは適しているのか。理解することができるのか。」と

いった悩みを抱えていたという。しかし、「経験したことの無い事であるからこそお話しの世界で体験させてあげて欲しい」という助言をうけ、この題材を取り扱うことに決定した。疑似体験をさせてあげたいという思いもあり、人形劇の演出もできるだけリアリティーの出るような工夫を行っていた。

登場人物紹介と合わせて、実際に劇で使用された人形の写真を掲載した。授業が進むなかでシナリオに変更があった場面もあるが、最終的なストーリーを元に記述した。これより紹介する授業反省会の内容にも登場人物の名前が登場するため、ストーリーが分かるように詳しく説明を加えた。

(3) 授業観察と反省会の結果 (第1回)

反省会での教師の発言(反省点)の内容を以下の4点に分類し、どのように変化するか、その推移を追った。

①教具②演出③児童・生徒の様子④その他

【第1回授業反省会】5月2日(金)

授業日:5月1日(木)

・反省内容 (力士の名前は丸ゴシックで表記する。以下、同じ。)

「はっきよい畑場所」、初めての授業であった。全体として台本の覚えが不十分であったり、人形の操作に慣れていなかったりする様子が見られ、その観点からの反省が多かった。

教具	演出	児童・生徒の様子	その他
太鼓(パーランクー)の音 「和太鼓のいい音を聞かせたい。」 人形の色 「なすび里の色が背景と同一化している。」 人形の扱い 「人形を抱えるように持つと子どもに見えない。」 土俵の線 「斜めに引いた方が子どもから見やすい。」 演者の顔 「顔が目立つので黒子の頭巾を被った方がいい」 背景 「背景に土俵のような屋根などあってもいい。」	解説の声 「やかましいだけで何を言っているのか分からない。」 人形の向き 「舞台向かって左側からほとんどの人形が見えない。人形は正面を向いていなければならない。」 対戦後の塩 「塩のせいでせっかくの土俵が白くなってしまうので対戦後に掃いた方がいい。」 力士全員ですい海を支えるシーン 「全員並べるのが大変。だいこの嵐が受け止めるようにシナリオを変えよう。」 力士の印象 「誰が出てきたのか分からない。鳴き声みたいなのやつがあった方がいい。例えばきゅう竜が『きゅっ、きゅっ、きゅー』などのように、音声と現物を結び付けたい。」 対戦中の掛け声 「対戦中に『よっ!』などの掛け声で見ている先生方が盛り上げて欲しい。」 動作のスピード 「すい海の際はゆっくりしていたので分かりやすかった。全体的にもっとゆっくり動いた方がいい。」 間の取り方 「静と動をはっきりさせるためにも間が	行司の声 「行司の声が近くからするのでそちらの方に注目してしまい、視線が戻ってこない。」(この回は、行司が舞台袖にいた。) 覚醒の有無 「K君起きてた。Tくんも起きていました。」 表情 「真剣な顔してる。眉間にしわ寄せて。」 目線 「(ビデオを見ながら)今、行司の方を見ている。」「すい海の方を見ました。」 声 「行司の読み上げの時に、(反応するように)声が出る。」 体の緊張 「手に力が入った。すごい。よく見ている。」	教師の位置 「言葉遊びの時は教師が前に出た方がいい。」 準備の際の注意 「土俵を横切らずに回り込んで準備を始めたほうがいい。」 教師の服装 「長袖じゃないと腕が白くて目立つ」 人形劇後の注意 「劇が終わったらすぐに子どもの所に戻って子どもを見なければいけない。」 子どもたちの相撲鑑賞経験 「子どもたちは実際の相撲を見たことがない。一度本物の相撲を見せてあげたい。雰囲気を感じさせてあげたい。」

	<p>あった方がいい。」</p> <p>人形の細かい動作 「細かい動作は子どもたちに伝わってないのではないか。」</p> <p>勝敗の分かりやすさ 「勝敗のつき方に法則性があった方が分かりやすい。例えば、弱そうに見える方が勝つなど。」</p> <p>行司の位置 「見えにくい子どもには、行司の音がインパクトがある。舞台側から声がする方が子どもたちも注目しやすくなるのでは。」</p> <p>子どもの感想発表 「感想は発表した方がいい。」</p> <p>ことばあそび 「内容をお相撲シリーズに変更してはどうか。」</p>		
--	--	--	--

<表 1、第 1 回授業反省会、反省内容>

・反省内容の特徴

反省内容は演出についての意見が大部分を占めていた。教具、演出についての発言は、「人形劇の質を高めるための意見」と「分かりやすさを追求するための意見」の 2 つに分けられる。

一つ目の人形劇としての質を高めるための意見では、人形操作の簡素化のためのシナリオ変更や太鼓の音を和太鼓のいい音にしたいとの意見を筆頭に、人形劇自体の質を追及する

様子が窺えた。

二つ目の児童・生徒の分かりやすさに重点を置いた発言は、細かな動作の見直しや人形を常に正面に向けるなど、言葉の説明や動作のみでは状況を理解することが難しい重症心身障害児にとって分かりやすい人形劇とするための検討であった。

子どもの反応についての発言もあるが、全体として、人形劇そのものを仕上げるための反省点が大半を占めた。

(4) 授業観察と反省会の結果 (第 3 回)

【第 3 回授業反省会】 6 月 2 日 (月)

授業日 : 5 月 29 日 (木) 前回の授業から 4 週間を経た回

の授業とその反省会である。

・反省内容

教具	演出	児童・生徒の様子	その他
<p>舞台の形 「舞台の形が四角なら縄の形が目立って、もっと土俵のように見えたとと思う。」</p> <p>なすびりの向き 「背景と同化して人形が見えにくい。向きを考えて人形を操作しなければならぬ。」</p> <p>舞台の背景 「満員御礼の文字が上に上がりすぎているので、途中で止めて見えやすくしたらどうだろう。」</p> <p>人形の形</p>	<p>ことばあそび 「優しく語りかける感じで接しているのがいい。」</p> <p>人形登場のタイミング 「今回は呼び出しが終わってから人形を登場させたのでやりやすかったし、分かりやすかった。」</p> <p>観客との声のかけあい 「人形が『にん』などと言って止まると、観客も『お〜』の声がかかりやすい。」「みんなのタイミングが揃ったほうが分かりやすい。」</p> <p>すい海、四股の音 「すい海が四股を踏む音が大きいので、子どもたちが驚いている。」</p> <p>戦いの間 「すい海とだいの嵐の対戦前にある間が今回は本当に上手だった。タイミングが合っている。」</p> <p>人形の動作</p>	<p>目線 「T 君がたまね錦をみている。」「D くんはどこを見ているのだろう。」「下の方見て固まっている。」「でも目は動いている。」「すい海が飛ばされるシーンはみんな目で追っている。」「T 君はずっと舞台に集中しているのではなく、たまに目線を外したりしているので、疲れない。良い参加の仕方が出来ているのではないかな。」</p> <p>声</p>	<p>教師の感想 「初めての授業と比べるとだいぶ面白くて、上手になってきていると思う。」「動きが洗練されてきた。」</p>

<p>「人形だけで自立させるために植木鉢を体の一部にして足をつけたらどうだろうか。」</p> <p>すい海のつくり</p> <p>「手が短くて、手と手を合わせようとしても届かない。」「瞳が少し小さいので大きくしよう。」</p> <p>背景の幕</p> <p>「幕を下げていてことで終わった雰囲気を出せるかもしれない。」「幕はそのままにして余韻を残すのも効果的。」</p> <p>人形劇を見る姿勢</p> <p>「Hさんは始めてパンダ（座位保持椅子）に乗せたが、良かったのか。しんどそうな場面も見られた。」</p>	<p>「すい海がだいこの嵐を持ち上げたシーンは、すごく高く持ち上げた方が子どもに分かりやすい。」</p> <p>人形の動かし方</p> <p>「常に正面を向くような形が良い。特に対戦前の見合うシーンでは一度立ち上がって目を見せる方が印象強くなる。」</p> <p>人形のキャラクター</p> <p>「だいこの嵐だけ弱そうなキャラクターが際立っている。」「もう少ししたまね錦のキャラクターが出た方が良い。」「きゅう竜は戦っているときにももう少し声を出した方が、キャラクターがより際立つ。楽しくてかわいいキャラクター。」「にんじん若はイケメンのキャラクターにしてみたらどうか。」「たまね錦は少し田舎臭い感じにしてはどうだろうか。」</p> <p>効果音について</p> <p>「だいこの嵐がすい海を受け止めるシーンは音でも分かるようにドスンなどの音を入れた方が良い。」「フィナーレのBGMを今回は終わりの少し前に音量を上げて終わりを分かりやすくした。」「最後にもう一度太鼓の音を鳴らしたらどうだろうか。」</p> <p>勝敗の分かりやすさ</p> <p>「勝ち負けが見た目で分かりにくいと感じる。負けた方は土俵から出て、すぐに舞台から降りた方がいい。」</p> <p>観客の雰囲気</p> <p>「観客が笑ってくれることで、子どもたちも今は楽しい部分なのかもしれないと雰囲気で感じとることができるのではないかも。」</p>	<p>「Aくんは行司が話すときに出る。」</p> <p>体調の変化</p> <p>「横綱の戦いの前になるとDくんのゼーゼー（呼吸音）が始まった。」</p> <p>覚醒の有無</p> <p>「Hさん、だんだん眠くなってきた。」「Dくん段々目覚めてきた。」</p> <p>表情</p> <p>「T君、なんだか不安そうな顔をしている。」「Hさん、びっくりした顔しましたね。」「D君、全部取り組みが終わって安心した。」「みんな集中しているときの顔が違う。」「今にも笑い出しそうな顔をしている。」</p> <p>動き</p> <p>「Hさん、ただならぬ気配を感じて動き出した。」</p> <p>児童生徒の位置</p> <p>「T君を真ん中にしたのは良かったと思う。」「今回は4人だったが、人数が増えると円を描くみたいにして見えやすい状態にしなければならない。」</p>
---	--	--

<表 2、第 3 回授業反省会、反省内容>

・反省内容の特徴

演出についての意見が一番多く出たが、それに続いて、児童・生徒の様子についての意見も多く出された。

教具・演出については、「改善の再検討」と「人形の特徴づけ」の大きく分けて 2 点について話しあっていた。お互いに授業実践の良い点を評価したり、具体的な改善策を提案する前向きな発言が多い。

また、人形の特徴づけ（キャラクターづくり）を行うことで登場人物の違いを児童生徒に理解させたいとの意見

がでた。これらは、前回の「人形劇の質を高めるための意見」と「分かりやすさを追求するための意見」に比べて、検討内容の深化がみられる。全体として、人形劇の質が高まった事への肯定的評価が随所に感じられる。

児童生徒の様子については、「児童生徒の、見た目に分かる反応から感情（内面）を探ろうとする様子」がみられた。目線などの見てとれる表出から、「何を見ているのだろう」とその行動の理由や児童生徒の意思をさぐろうとする発言がみられた。

(5) 授業観察と反省会の結果（第 5 回）

【第 5 回反省会】 6 月 12 日（木）

授業日：6 月 12 日（木）

・反省内容

教具	演出	児童生徒の様子	その他
効果音の位置	にんじん若のキャラク	目線	カメラの位置

<p>「後ろで音を流すことによって、子どもたちの意識が後方に向かっているのかもしれない。」</p>	<p>ター 『にんじん若』が歌と一緒に出てきたので子どもの視線も集中した。」 きゆう竜のキャラクター 「声のトーンで、勝って嬉しいのがよく伝わる。」 行司の呼び出し 「行司の盛り上げ方が上手。それにつられて観客も盛り上がっている。」 フィナーレ 「フィナーレにとる時間が長い。音楽が終わる前には終わらせる。」</p>	<p>「横綱同士の戦いになったら、前を向いている子どもが多かった。」「動くものに視線がいつている。」 動き 「T君、よく動いている。」「Hさん、音ではビクビクしない。内面からくるものではないか。」「横綱の戦い中、A君の動きが止まっている。集中して見ている。」 「D君も手がよく動いて、視線は外れているけれどしっかり聞いていることが分かる。」 声 「A君、しっかりと声が出ている。内容が分かっているようだ。」 表情 「T君、笑っているように見える。いいぞいいぞという感じで。」 集中力 「A君、劇の最中と終わった後が全然違う。そして、以前と比べて落ち着いて見られるようになってきた。終わると、集中して疲れたからかあくびをしている。」 好きなキャラクター 「T君はたまね錦が出てくるとしっかり見る。好きなかもしれない。」 姿勢 「首が疲れるかもしれない。」</p>	<p>「子どもの様子がはっきりと分からないので、表情が分かるような位置で撮影した方が良い。」</p>
---	---	--	--

<表 3、第 5 回授業反省会、反省内容>

・反省内容の特徴

人形劇が教師の満足する形となり、教具・演出に関する意見が落ち着きをみせ、児童生徒の様子を中心とした意見が多くあがってきた。前回までは児童生徒の内面を探ろうとする端緒的な発言が見られたが、今回は、内面理解に関わる「仮

説的」な意見が多くみられた。「たまね錦が出てくるとしっかりと見るのは好きだからかもしれない。」など、児童生徒の表出から、教師が自分なりの見解を見つけ始めたと考えられる。前回までの「なぜ、～なのだろう」という発言から、「～なのは〇〇だからかもしれない」と発展した内容になっている。

(6) 授業観察と反省会の結果 (第 6 回)

【第 6 回反省会】6 月 27 日 (木)

授業日：6 月 26 日 (木)

HさんとT君の観賞用にクッションチェアー(スポンジ製の姿勢保持椅子)を初めて使用した。**にんじん若**の登場シーンで「やんすー、やんすー、**にんじん若**でやんすー」と歌う

ようになった。また、キャラクターが目でも伝わるように、葉っぱの部分にカーンさせ前髪のように見せていた。

・反省内容

教具	演出	児童・生徒の実態	その他
<p>クッションチェアーの導入 「クッションチェアーに座っていることで首が動きやすくなっている。」 「クッションチェアーに座ることで楽に見られていると思う。」</p>	<p>すい海が飛ぶシーン 「動きが少し早い。目で追うためにはもう少し遅い動きだと目が追いやすい。」 「なぜ、すい海が飛んできたのか、子どもたちに伝わっていないと思う。クシャミで飛ばすというのはどうだろうか。」 効果音 「大きな音をきっかけとした方が、すい</p>	<p>視線 「T君、すごく見ている。」「T君は見たいところが見られているので良い。」 表情 「D君、眉間にしわ寄せて険しい顔して見ている。」 動き</p>	<p>ビデオの位置 「表情が見られるように、顔の向きに合わせてビデオを設置した方が良い。」 子どもに伝えたいこと</p>

<p>にんじん若 「髪の毛をリーゼントのようにして、キャラクターが分かりやすいようにした。」</p> <p>掃除の人 「集中力の短い子どもたちに、いかにして場面転換を分かりやすくするかを考えて、掃除の人を登場させた。」</p> <p>人数の問題 「人手が足りないので効果音を過剰に増やすことなどは出来ないため、簡単なものにした方が良い。」</p>	<p>海が飛んでいったことが分かりやすい。」「ラジオドラマなので、音で強調しながらの劇でなければいけない。」</p> <p>だいの嵐が受け止めるシーン 「受け止めた場面がよくわからない。音があった方が良い。」</p> <p>場面の変化 「だいの嵐とすい海の対戦シーンの終わりが分かり難い。」「掃除の人の登場で場面の变化を分かりやすくした。」</p> <p>教材の面白さ 「弱そうなものがたまたま勝つのがこの教材の面白さ。ストーリーに統一性をもたせたい。」「コメディイのような、面白さを伝えたい。」</p> <p>解説者 「役者がたくさん話した方が伝わりやすい。」</p> <p>観客 「誰かが笑わなければ、子どもたちも笑って良いのか分からない。観客が盛り上げる必要がある。」</p>	<p>「Hさんは試合のときは動かない。」「T君とD君の腕が上がる。」 「行司の声やすい海のシーンに舌を出して反応する。」</p> <p>疲れ 「3試合目になると疲れが出てきている様子。首の固定が上手く出来ていなかった。」「A君、劇が終わって疲れている様子であくびをしている。」</p> <p>脈 「様子を見ると落ち着いていた。脈も落ち着いていた。」</p> <p>授業の関係 「高等部は午前中も授業があったので疲れが見られる。」</p> <p>好きなシーン 「たまね錦の声にビクッと反応していた。」</p> <p>顔の向き 「日によって顔の向きが違う。」</p>	<p>「わくわく感やほのぼの感ではなく、今回は面白さ、コメディイを伝えたい。」 「お笑いは真剣にしなければ成立しない。真剣に演技する。」</p>
--	--	--	--

<表 4、第 6 回授業反省会、反省内容>

・反省内容の特徴

前回は、教具・演出についての意見は少なく、落ち着いてきたかに見えたが、今回また再度議論が多くなされた。これは、前回の反省会で児童生徒の様子について詳しく見つめなおしたことを踏まえて、「訪問学級の児童生徒の実態に即した授業づくり」を行おうとしているためであると考えられた。「人形劇であるが、ラジオドラマ（聴覚優位な子たちにとっても分かりやすい音だけで成立する劇ということ）でもある」との発言は聴覚優位の児童生徒が多い訪問学級であるからこ

そ出た発言である。また、「子どもたちに伝えたいこと」を再度全員で確認するなど、訪問学級の「おはなし活動」の価値を再確認する様子がみられた。

児童生徒の様子については、前回の「仮説的」な意見から、観察事実に基づく「検証的」な意見へと変化がみられた。これは、教師が自分なりの仮説をもって授業を行った結果、児童生徒の様子を、より確信をもって把握、理解することができたためだと考える。

(7) 授業観察と反省会の結果 (第 7 回)

【第 7 回授業反省会】7 月 4 日 (金)

授業日：7 月 3 日 (木)

だいの嵐がクシャミをして、すい海が飛ばされるという内容の変更があった。また、全体研究会のために授業見学者もあったことから、全体の雰囲気が普段よりも高揚していた。

今回は全体研究会に向けて、対象児一人を大きく映したビデオを見て反省会を行った。しかし、児童・生徒の様子については、ビデオに映っている対象児以外の表出についてもたくさんの発言が見られた。

・反省内容

教具	演出	児童・生徒の実態	その他
<p>クッションチェアへの導入について 「クッションチェアに座ることによって、首が動きやすくなり、</p>	<p>人形の声 「すい海の塩まきの声が横綱の雰囲気が出ていて良い。」 間について 「横綱の試合はメインの試合なので時間をたっぷりとる。」 アナウンスの声色</p>	<p>動き 「呼び出しで、目をパチパチした。」「人形が四股を踏む音でビクとする。しっかりと聞いている様子。」「毎回塩まきの音にビクとする。」「盛り上がったときに体が動く。」 表情</p>	<p>他の授業との関連性 「きゅう竜の声は他の授業でも使えるのではないかと。」 授業計画について 「次回が最後の予</p>

<p>好きな場所に目線が動かせるようになった。」</p> <p>スポットライト</p> <p>「スポットライトを使って集中できる環境を作りたいが、道具がない。また、操作する人が居ないためできない。」</p>	<p>「アナウンスの声、観客の声色、行司の声の変化が上手で一人で演技しているように思えない。」</p> <p>だいの嵐がすい海を飛ばすシーン</p> <p>「くしゃみで飛ばす設定にしたことで、すい海が飛んで行ったことがすごく分かりやすい。」</p> <p>動きのスピード</p> <p>「気持ちとしてはゆっくりと動いていたのだが、実際にビデオを見てみるとまだ早かった。」</p> <p>間について</p> <p>「間をしっかりととったつもりだったが、ビデオを見返して聞いてみると、もっと間があっても良い。」</p> <p>場面の変化</p> <p>「負けた者がすぐに退場することで、勝ち負けや場面に変化をつけることが出来る。」</p> <p>フィナーレ</p> <p>「一体にとる時間が長くて曲が終わってしまう。もう少し時間を気にしながら退場して欲しい。」「横綱を長くして強調するのは良い。」</p> <p>掃除する人</p> <p>「子どもが目で追っているので、間を大切にしながら、一度止まった方が良い。」</p> <p>時間</p> <p>「全体的に長い。子どもたちも面倒くさくなる。」</p>	<p>「人形が出てくると表情にわずかな動きが出る。」</p> <p>緊張</p> <p>「対戦中は体に力が入っている。」「好きな場面になると体に力が入る。」「人形が出てこない場面では気を抜いている様子。リラックス出来ている。」</p> <p>姿勢</p> <p>「長時間になると姿勢の関係で苦しうに見える。」</p> <p>内容の理解</p> <p>「あくびをしていたのに寝ないところが凄い。にぎやかさや何かが行われていることが伝わっているのではないか。」</p> <p>目線</p> <p>「目線がしっかりと舞台に向いていた。前回よりもしっかりと見ていた。」</p> <p>「初めころは音に反応して目線がうごいているのかと思ったが、回数を重ねてみると他の要因があった様子。」</p> <p>声</p> <p>「掛け声と一緒に声を出している様子なので、見通しを持っていてのではないか。」</p> <p>覚醒</p> <p>「回を重ねるごとにお話しが分かってくる。そのことで目が覚める」</p>	<p>定だったが、やっと形になってきたところなので、もう少し続けてもよいだろうか。」</p> <p>時間割について</p> <p>「木曜日は疲れが出る日。その日の午後にはなし活動をするので眠たくなるのは当然ではないかと思う。週の前半で授業をするとまた違って来るのではないか。他の授業の関係で時間の変更は出来ないが・・・」</p> <p>最終回の雰囲気作りについての提案</p> <p>「最終回はたくさんの人を連れてきて、にぎやかな雰囲気を作ってみてもらいたい。」</p>
--	--	--	---

<表 5、第 7 回授業反省会、反省内容>

・反省内容の特徴

教具についての意見は落ち着きをみせたが、演出についてはまだまだ議論がなされている。教具・演出についての意見は「実践の確認と評価」が主となっている。大きな変更点ではなく、「間をもう少し取った方が分かりやすい」など、これまで出てきた反省点をさらに深めたり、「分かりやすい」などと評価したりする様子が見られた。

児童生徒の様子については、「見て分かる表出から児童生徒の内面を説明」する様子がみられた。前回までは教師が自分なりの解釈で「仮説」や「検証」を行っていたが、今回は、「動き」「表情」「身体の緊張」「姿勢」「目線」「声」「覚醒」などの客観的事実を論拠として説明していた。子どもの内面理解にエビデンスを与えようとしていた。

3. 考察

(1) 授業反省会の発展的経過

授業反省会の記録から、教師たちの話合いはだんだんと発展的に展開されてゆくことが明らかとなった。

a. 教具・演出について

教具、演出についての意見は、4つの段階を経て発展的に議論されることが分かった。

第一段階は第1回で話し合われた、「人形劇の質を高める」

「障害の重い子どもに対しての分かりやすさを求める」段階。

第二段階は、第3回、第4回で話し合われた「改善の再検

討」と「人形の特徴づけ」を行う段階。

第三段階は、第6回に話し合われた「訪問学級の児童の実態に合わせた授業づくり」を行う段階。

第四段階は、第7回以降続けられた「実践の確認と評価」を行う段階である。

第1回反省会では主に「人形劇の質を高める」意見と「障害の重い子どもに対しての分かりやすさ」についての2点について話し合われた。

第3回、第4回反省会では、「改善点の再検討」と「人形の特徴づけ」を中心に話しあわれた。この頃になると劇の内容が大まかに定まり、それ以降大きな変更が行われることはなかった。「人形の特徴づけ」に関しては、特に第4回反省会で重点的に話し合いをおこない、登場人物について一人ずつ分析的に特徴づけを行った。結果、人形それぞれの違いが分かりやすくなった。「人形の違いを分かる」というのは、本単元の目標とするところでもあり、第4回話し合いは本単元の本質に迫るものとなっていた。

第5回反省会では教具、演出についての話はほとんど出てこなくなり、かわりに児童生徒の様子を集中して話し合うようになった。この際に児童生徒の様子について十分な時間をかけて意見交換を行ったことで、次週に行われた第6回授業では変更点や工夫点が多くみられるようになった。特に「ラジオドラマ（音を聞くだけで内容を把握することのできる劇）にするために効果音でもっと動作を強調しなければならない」といった発言などは、訪問学級には聴覚優位の子が多いことを意識しての発言である。この第6回反省会では、授業の価値を再確認する様子も見られ、重要な反省会であったと考えられる。

その後、第7回以降反省会では、「実践の確認と評価」が行われた。次の題材へとつなぐため、実践の評価を行い、良い実践は引き継ごうという意識が作用している。

b. 児童生徒の様子について

児童生徒の様子については、「見た目に分かる反応」を一つ一ついいねに拾っていくことからスタートし、児童生徒の内面を探ろうとする段階から、教師自身が答えを見つけてゆき、最終的には「見て分かる反応から児童生徒の内面を説明」するまでに変化していた。

第1回反省会では、児童生徒の「見た目に分かる反応」を職員全員で情報交換していた。

第3回と4回反省会では、「目線」や「体の緊張」「声」「表情」など、教員が児童生徒を見る視点に大きな変化は見られない。しかし、これまでに観察してきた「見た目に分かる反応」から「どこを見ているのだろうか」と児童生徒の内面を探る様子が多く見られるようになった。また、回数を追うごとに教師たちの、児童生徒の内面を知りたいという欲求は高まったと思われる。

第5回反省会では「仮説的」に児童生徒の内面を推測する発言が多くみられた。「○○なのは△△だからではないだろ

うか」といったような発言である。この「仮説」を元に授業を行った結果、次の第6回反省会ではより「検証的」に児童生徒の内面を説明する様子がみられた。

さらにその後、第7回反省会では、「見て分かる反応から児童生徒の内面を説明する」様子がみられた。その際に確認していた反応は「体の動き」「表情」「体の緊張」「姿勢」「目線」「声」「覚醒」「脈」などであった。

教具、演出、児童生徒の様子いずれについても、第6回反省会が重要であった。

授業がスムーズに進行するようになり、また、児童生徒の理解が深まってきた中で、もう一度題材の価値について問い直し、全員での共通理解を行ったことで授業が深まっていった。

a.b.の観点を総合的に見ると、まず、教具、演出を改善し、人形劇を仕上げる段階があり、それが落ち着きを見せる中で、児童生徒の様子（反応）の観察が増えていき、その意味を仮説的に考えながら、再度、人形劇そのものを改善する段階となる。劇に修正を加える中で、児童生徒の様子に対する理解が確信へと変化し、表情や声など、エビデンスをもって内面を説明できる段階へ移行したとみられる。

(2) 研究全体を通して

次に研究全体を通して、重要だと感じた点について述べていく。

a. スムーズな授業の成立が第一目標

重症児の授業づくりに取り組む際、まず目指すべきことは、スムーズな授業の成立だということが分かった。訪問学級での反省会の話題の中心は、「教具→演出→児童生徒の様子」と移り変わっていった。このことから、授業をまずはしっかりと成立させ、スムーズに展開することに教師たちが重きを置いていることが分かった。また、授業研究を熱心に行い、児童生徒に伝えたい授業の価値を明らかとすることで、児童生徒を理解する視点もはっきりとしていくことが分かった。

授業の価値については、特に第6回反省会において中心的話題となった。経過をたどると、授業実践を重ね、スムーズに劇や授業が進行するように努めることが優先的に行われることで、スムーズな授業が確立され、その後に授業の価値についての検討や再確認が行われたことが分かった。

b. ビデオを使用し、子どもを理解すること

授業のスムーズな成立が保障された後に重要となってくるのは、「重症児の様子をどのようにとらえるのか」という問題である。重症児は表出が微細で、関係者であってもすぐには分かりづらいことが多い。

そこで、授業の記録をビデオで行うことは有効な手段であったと考える。ビデオで記録することで、見逃した表出を発見し、そのタイミングや意味を確認することが可能になる。

また、複数でビデオを確認することで、児童生徒の表出の捉えが、一人の教師だけのものではなく、より客観性をもつ

たものとなる。

重症児教育において、教育目標・教育評価が重要課題となっている。近年の客観的目標、評価を重視する傾向に対しても、ビデオを使用する方法は有効であると考ええる。児童生徒の表出をビデオで改めて確認しながら記録を行えば、周囲の状況なども加味した、より客観性をもった報告にすることが可能となるし、ビデオをもって実証することも可能である。

しかしながら、実際に授業の現場に居たものでしか感じるこのできない、空気感や雰囲気などがあることも忘れてはならない。ビデオでは記録することのできない雰囲気や様子も言語的に記録し、残しておく必要がある。

重症児の授業づくりにおいて、筆者らが重要だと考えるのは、教師自身が授業を楽しむことである。訪問学級の観察で印象に残っているのは、授業中や反省会など、どの場面でも常に教師が笑顔であったということである。

重症児は、大人の会話の内容などをそのまま正確に理解することは難しいが、その場の雰囲気や集団の情動や高揚感を感じとることは可能である。教師集団が授業づくりを楽しんでいることは、その意味に固有の価値を有すると言える。

また、重症児を一人の人格的存在として接することも大切であると考ええる。訪問学級教員によって「人として」大切に遇される重症児は、人形劇の場面で感じとる緊張やスリルも、教員をキーパーソンとして支えにすることによって、安心して向き合うことができるのではないだろうか。

重症児の授業づくりは配慮すべき事項も多く、目に見えて成果がすぐには出ないために、悩ましい時間も多であろう。しかし、子ども一人ひとりを大切に思い、努力を続ける教師たちの思いは子どもたちにもきっと伝わるはずである。重症児の授業づくりには近道などなく、楽しみながらも、地道に努力を続けることが重要であると訪問学級の教員から学ぶことができた。

<筆頭執筆者による後記>

大学を卒業し、社会人になり、福祉という場で子どもたちと関わっている。子ども一人一人を大切にしながら活動をする難しさを実感している。現在の職場では重い障害の子どもたちと関わる機会はないが、この研究で学んだ「一つの人格的存在として」子どもと接する態度や考えが生きている。

訪問学級教員は「おはなし活動」に試行錯誤しながら取り組んでいた。反省会では記録しきれないほどの発言があり、回数を重ねるたびに新たな工夫が加わり、段々と手の込んだ、それでいて分かりやすい劇になっていった。沢山の時間をかけて改善された劇からは、たくさんの愛情の詰まった温かい雰囲気が感じられた。その温かさは子ども達にも伝わっていた。楽しみながら地道に努力する方法を、私も実践できるようにしたい。

引用・参考文献

- 飯野順子編著 (2005) 『障害の重い子どもの授業作り—聞く・支える・つなぐをキーワードに—』 ジアース教育新社
- 岩内亮一・明石要一編著 (2010) 『教育学用語辞典〔第四版(改訂版)〕』 学文社
- 遠藤信一(1992)「一重度・重複障害幼児の意思の表出を促す取り組み」特殊教育学研究 29(4)p.21-25
- 岡田喜篤・鈴木康之・末光茂編著 (2005) 『重症心身障害療育マニュアル 第2版』 医歯薬出版
- 大久保哲夫・三島敏男編著 (1997) 『障害の重い子どもの教育実践ハンドブック』 労働旬報社
- 大島一良(1971)「重症心身障害の基本的問題」公衆衛生 35,648-655
- 片桐和雄・小池敏英・北島善夫 (1999) 『重症心身障害児の認知発達とその援助—生理心理学的アプローチの展開—』 北大路書房
- 川住隆一・野崎義和 (2011) 「超重症児に対する教育の充実・発展に向けての研究課題—全国調査を踏まえて—」 東北大学大学院教育学研究科研究年報 59(2)p.247-263
- 川間健之介・西川公司編著 (2014) 『改訂版 肢体不自由児の教育』 放送大学教育振興会
- 川田みどり・小池敏英・堅田明義 (1986) 「重症心身障害児・者の要求表出と指導員の理解」特殊教育学研究 24 (3) p. 41-49
- 清水貞夫・藤本史朗編著 (2009) 『[改訂増補版] キーワードブック障害児教育—特別支援教育時代の基礎知識』 クリエイツかもがわ
- 田中道治・乾初枝・ほか (2000) 「重症心身障害児の授業過程の分析—行動カテゴリーと心拍変動との関係に着目して—」特殊教育学研究 38(1)p.1-12
- 兵庫重症心身障害児教育研究会実行委員会編 (2004) 『重症児教育—視点・実践・福祉・医療との連携—』 クリエイツかもがわ
- 平原春好・寺崎昌男編著 (2011) 『新版 教育小事典【第3版】』 学陽書房
- 三木裕和・越野和之編著 (2014) 『障害のある子どもの教育目標・教育評価—重症児を中心に—』 クリエイツかもがわ
- 森田唯・是永かな子 (2012) 「重症心身障害児に対するベッドサイド学習—病弱特別支援学校での実践に注目して—」高知大学教育学部研究報告 第72号 p181-196
- 渡部昭男 (1996) 『「特殊教育」行政の実証的研究—障害児の「特別な教育的ケアへの権利」—』 法政出版株式会社
- 厚生労働省 (2012) 「平成24年度重症心身障害児者の地域生活モデル事業結果報告書」
- <<http://www.mhlw.go.jp/seisakunitsuite/bunya/huk>

ushi_kaigo/shougaishahukushi/cyousajigyou/dl/1305
30_01.pdf) 2014年12月09日アクセス

- 国立特別支援教育総合研究所
([http://www.nise.go.jp/cms/keywords/1-.kws
tring.12.html](http://www.nise.go.jp/cms/keywords/1-.kws
tring.12.html)) 2014年12月06日アクセス